

開発 教育 ニュースレター



No. 41

1993. 3

開発教育協議会

スリランカの果物屋さん

移動式の屋台。毎朝ここにやってくる。

ヤシの実、パイナップル、バナナ、パパイヤ、マンゴスチン……。

男の人が身に付けている腰巻きは、「サロマ」と呼ばれる。

木下智子（東京）

今年の総会は5月8日(土)、東京YMCAで

開発教育協議会の今年度の活動について話しあう総会が、5月8日(土)、東京YMCA(千代田区神田)で開かれます。

会員の方には後日改めて詳しい案内をお送りします。ぜひ、ご参加ください。



ある日の運営会議

開発教育協議会事務局 運営委員 募集!

開発教育協議会では、現在6つのタスク・チーム(全国研究集会、ニューズレター、機関誌、ワークショップ、情報センター、地域セミナー)に分かれて活動を行っていますが、理事会と連絡をとりながら、実際の運営に携わっているボランティア・スタッフが事務局運営委員です。

1993年度の協議会の運営に、あなたも参加してみませんか? 協議会の会員で、平日夜の運営会議(月1回、不定期)と、希望のタスクチームのミーティングや活動にできる方であれば、どなたでも結構です。

今後、勉強会の開催など、新しいタスク・チームについても検討していく予定です。開発教育はまず「参加」することから。協議会の発展に、ぜひあなたの力をかしてください。

4月8日(木)午後6時30分より、協議会事務局において、運営委員募集説明会を行ないます。「どんなものか、ちょっと覗いてみるだけ」でもかまいません。関心のある方は気軽においでください。

問合せは、木下(運営委員) ☎045-671-7070(職場)、又は協議会事務局まで。

Books

「近代北方史 アイヌ民族と女性と」 海保洋子 (三一書房)

「アイヌ、神がみと生きる人々」 藤村久和 (福武書店)

ニューズレター1月号に引続き、今年は「国際先住民年」なので、2冊の本を紹介します。どちらの本もアイヌ民族に関する良書です。

海保氏の本は、昨年6月に出版されました。明治以後の北海道開拓至上主義に対し、アイヌ民族を視座の中心にすえ、アイヌ史および女性史をもとらえ直す観点で書かれています。今までのアイヌ民族に関する本のなかで(といっても、数少ないのですが)本書の画期的な点は、その困難さゆえに今まで研究されてこなかった、近代のアイヌ民族女性史が展開されているところにあると思います。

この書を通じ、和人主観のみで歴史を判断することなく、アイヌ民族のおかれてきた立場や、社会的に弱い状況にあった女性たちを、まず理解していくことから始めましょう。

他方、藤村氏の著書は、彼がアイヌの古老たちからうかがった、民族に共通する世界観や人生観そして、人としてのあり方を、語り口調でまとめあげたものです。語りがソフトであるという点を除いても、氏のアイヌ民族を愛する暖かい感性が伝わってくる想いです。

開発教育を考えるうえで、本当の意味での人と人との関係や、環境問題、自然との共存について、示唆に富む視点を与えてくれるのではないのでしょうか。楽しくて素晴らしい世界観に触れながら、今までの日本が取り続けてきた近代化政策や、自分たちの足元を再考し直すことは大切なことだと考えますがどうでしょうか。

以上、2冊紹介しましたが、これらの本を買う場合、大きな書店へ行っても本がないことが多く、また値段が少々高いので、図書館を利用するのがよいかと思います。

国連でも認めているように、アイヌ民族は、日本の先住民族です。和人とアイヌ民族が良きシサム(隣人)となるために、互いに人間としての尊厳を認めていくことから出発しましょう。他者と同じ目の位置で、より人間らしい生き方や価値観を共にめざしたいものです。

(杉本由美子)

地域セミナーが開催されました



1月から2月にかけて、松本、大阪、岡山の各地域で、開発教育地域セミナーが協議会と地域組織との共催にて開催されました。この種のセミナーは今回、初めて試みられたもので、中期計画にも盛り込み協議会としてその開催に尽力してきました。開催のねらいは、今後の開発教育の進展をはかるために、各地域にて抱えている課題、問題点などを協議し方法論等の検討などを行なう中で、地域内、地域間のネットワークを作っていく場を設けることでした。プログラム内容は各地域組織にて検討していただいたため、地域の課題がプログラム内容に反映され各地域とも充実した内容でした。各地域のプログラムに参加した者として心証を中心に紹介します。

松本では1月23日、終日、松本市内の旧制松本高校の校舎であった、あがたの森文化会館を会場に市内及び飯田からも30名を超える参加者を得て、「自分が地域をどうしたいか」をテーマに開催されました。4名の方の地域での活動が紹介された後、参加者の活動が紹介され意見交換が行われました。各地での生活に密着した形で開発教育がそれと意識してでなく進められている状況が印象的でした。地域組織から協議会へ「地域に何が出来るの」との一つの重い問いが寄せられました。

大阪では1月23日昼から24日夕方まで、神戸市にある神戸学生青年センターにて「参加型学習活動の理論と方法」をメインテーマにサブテーマを「ワールド・スタディーズを素材にして」として定員30名で開催されました。サブテーマから分かるように最近話題の本を取り上げ、具体的に方法論を学ぼうという意欲的な内容であり参加者はNGO、社会教育関係者に限定されていました。学んだり知った内容をどのように、今後は発信者になって伝えていくのかが、残された課題のようです。

最後に、岡山では2月6日午後から7日夕方まで、89年の全国研究集会が開催された岡山県青年館を会場に、中国、四国からの30名を超える参加者を得て、その当時できた南北ネットワーク岡山が地域組織として受け入れて下さり開催されました。プログラムは3セッションに分かれており、1セッションでは中四国の現状報告を参加者同士で行い、2セッションでは開発問題をシャプラニールのビデオをもとに開発プロジェクトを作るという興味深いプログラム、3セッションは食糧問題を身近な食糧から学ぶというプログラム構成でした。夜は懇親会がエンドレスで行われ情報交換に花が咲いておりました。

各地では、今回の地域セミナーを機会にNGOのネットワークを今後作るとか、顔が見える関係が出来たなど、それなりの成果をおさめることができました。各地域の課題はそれぞれですが、地域へ開発教育の浸透を計るためには今後もこのような形態のプログラムを行い、地域でのネットワークが作られていくことに協議会が力をいれて行くべきであると思われました。次年度も何らかの形で開催できることと思いますが、みなさんの地域で受け入れて下さるようでしたら、一度事務局までご一報下さい。詳細な報告は、編集方針により機関誌「開発教育」には掲載されませんので、別途4月に発行されます報告書を事務局にご請求ください。

今回の地域セミナー開催は、国際協力推進協会の協力で開催されましたので紙面を借りてお礼申し上げます。

(北村 暁晴)



開発教育国際フォーラム「“地域”は“世界”を変えていく」 1993年1月29日～31日

1月29日～31日の3日間、開発教育協議会など複数の団体が主催した開発教育国際フォーラム「“地域”は“世界”を変えていく」が開催されました。「地域」をキーワードに据えた今回のフォーラムでは、開発教育以外及びユニセフからの活動報告をまじえ、NGO、政府、自治体代表者らを中心に、新しい開発教育のあり方や地域における可能性について討議されました。参加者は300名を超え、さまざまな立場の人達が、地域に根ざした活動を有意義に学びあうことができたようです。

フォーラムのメイン会場と、分科会の一つ「在日韓国・朝鮮人」の問題をテーマとした、川崎市桜本への「体験トリップ」の様をお伝えします。

1 メイン会場（横浜女性フォーラム）にて

1日目は、開発教育における南北協力の接点を見出すという意味からも、イギリスからはトニー・ウィリアム氏（OXFAM 開発教育ディレクター）による「イギリスの開発教育の変遷」、フィリピンからはクリスティナ・リアムソン氏（元 PHILDHRA 事務局長）による「開発教育・南からの視点」といったそれぞれの演題で基調講演がありました。

2日目は、日本における開発教育の歴史を振り返りながら、21世紀に向けた開発教育のあり方について、学校教育分野（金谷氏）、市民運動やNGOでの取り組み（平田氏）、社会教育分野（池住氏）など各方面で牽引的役割を担ってきた代表者をパネリストに迎え、その可能性について報告がありました。この報告の中で三者に共通していた内容は「開発教育を通して、実は自国あるいは自分自身を再度問い直さなければならない」ということ。つまり開発教育は、途上国に学びながら自己改革をすすめるプログラムなのだという事です。例えば学校教育の場合、「開発教育を取り入れる以前の、日本の教育全体が置かれている状況に目を向けなければならない」とし、市民運動やNGOの活動の中にあれば、「その活動がすべて善であるという誤った観念はないか、途上国の人たちのパートナーとしてどう関わっていいのか、日本人としてあるいは一人の人間としてどうあるべきなのか、などについて真剣に考えなくてはならない」。それらをふまえた上での三者の報告は、未来に向けた日本での開発教育の可能性を示唆してくれるものでした。

午後は、「地域からのアクション 体験トリップ&分科会」が10ヶ所で行なわれました。6ヶ所の体験トリップは、在日外国人を通して考える「女性・人権」、あるいは「多文化・異文化、多価値」、第三世界ショップでの「もうひとつの貿易」、また学校内の授業や特別活動、神奈川県国際交流協会の市民への働きかけなど、実際に現場を訪ねることによって、それぞれの事情を深く理解する機会を得ました。4ヶ所の分科会では、スタディ・ツアーの報告、NGOによる開発教育、教材づくり、環境問題への取り組みなどがあり、それぞれの対象に向けた開発教育の「目的」や「手段」の検討や、問題点、課題、提言などがまとめられました。

3日目は、「体験トリップ&分科会」の報告と、

今回のフォーラムで提出された『地球市民宣言（21世紀に向けた「開発教育」アクションプラン -以下「アクションプラン」という）』のための問題提起がなされ、地域からの視点で世界との関係を問い直す時期が来ていることを確認しました。その後、特別講演としてノラ・ゴッドウィン氏（ユニセフ・ニューヨーク本部開発教育課長）による「ユニセフの開発教育（Education for Development）」の報告がありました（概要を知りたい方は『開発教育』22号参照）。「地域でのアクションは必ず1つの大きなアクションになり、いつか世界を変えることにつながる」ということを教えていく、それがユニセフの開発教育であるとゴッドウィン氏は力説されていました。

1980年、横浜において開催された、日本で最初の開発教育シンポジウム「人類共存の道を求めて」以来12年あまりが経過し、世界情勢の変化とともに各分野で新たな開発教育のあり方について検討が重ねられてきました。

今回の「アクションプラン」の草案についても、参加者からの活発な意見が寄せられて検討、討議されました（実行委員会において後日完成予定）。「アクションプランは、裏から見れば現在の日本社会です。つまり、アクションプランの実現は、日本社会をひっくり返すということ。私たちはそうしなければならないのです。（中略）国内にも小教者、弱者、置き忘れたものはたくさんありますし、地域での実践は始まっています。すべての人々との連帯によって、地域は世界を変えることができなくても、国を変えることはできるのではないかと。できることから始められるのではないのでしょうか」武者小路公秀氏（フォーラム実行委員長）が閉会の辞で述べた以上のような内容は、3日間のフォーラムの締めくくりとしても非常に印象的でした。

（林 美栄子）



2 体験トリップ

川崎市池上町・桜本地区を訪ねて

池上町・桜本地区は、戦前・戦中と軍需工業地帯だった。たくさんの朝鮮人が強制連行されて、戦後も多数の人が住み続けざるを得なかったと聞く。

そこに、在日韓国・朝鮮人と日本人がふれあう場として「ふれあい館」がある。

その「場」に、私たちも訪れ、この地区でさまざまな葛藤を経ながらも「共に生きる」ことをめざし実践されている方のお話を聞いた。在日大韓基督教牧師であり、その教会の保育園の園長で、白髪、ベッ甲眼鏡の李 仁夏（イ・インハ）氏は、日本人と在日韓国・朝鮮人が生活の場において、共に文化を共有し、異いを認め合い、次の世代を育て、彼らが大きくなって住みつづける地域にしていきたい、とおっしゃった。次に、この地域の4つの町の町内会や商店街が中心になり結成した「おおひん地区街づくり協議会」理事長であり、店主の高橋氏は、年々、住人が少なくなっているこの地区で、在日韓国・朝鮮人と日本人が共に、自分たちの住む街づくりに取り組んでいきたい、と話された。3人目は、住民福祉に取り組みたいと、民間から県下の市の職員に「デュード」した金氏の在日としての生い立ちや、市職員になってからの「善良なる一市民」からの嫌がらせの投書や励ましを受けたお話。

その後、本分科会のまとめ役の山田氏の案内で、住民の約6割が在日韓国・朝鮮人の池上町周辺をトリップ。ふれあい館から商店街を通り抜け、東京湾をめぐらして産業道路を越えたら、日本鋼管が今も書類上約7割の地権を持つ「不法占拠」の街。「不法占拠」ゆえ水道管本管も下水道も、産業道路まででストップ、住民が自前で整備したと聞く。

一巡り終えたとき、ちょうど夕闇迫る頃で、頭上を走る薄汚れた産業道路が、この一角をまわりから

遮断しているような光度の違いを感じたのは、単に商店街の照明の有る無しによるものだけではないようだ。強制的に連れてこられ、帰国する手だても補償されず、サンフランシスコ講和条約後は、これまでとは違って変わって「外国人」といわれ、憲法にうたう人権も保証されず、今日に至っている。このことに気づこうともしない多数の「日本人」の意識の低さの現われと見えたのは、うがちすぎか。

いつも、「強者」は傲慢無知で、「弱者」が控え目に提示するまっとうな要求さえ、足蹴にするか、恩着せがましく認めてやるというふうだ。相手が見えないときにはなおさらだ。取るに足らない対象物と見なしてきたものの助けを必要とする状況になって、やっと相手が見えはじめ、今までのいきさつを忘れて「共生」（かっこつきの）をめぐらそうという。相手は憤りを胸に秘めつつも、「そうですね」と差し出された手を握ってくれる。このようなことが日本のあちこちで見うけられないか？ なにも在日「外国」人のことに限ったことではない。健常者と障害者の関係かもしれないし、男と女の、いや、わたしとあなたの間のことかもしれない。そんなこんな、気づき、思いを寄せられるようになるためには何かのきっかけが、出会いが、ふれあう場があった方がいい。そんな「場」のひとつを提供できるものとして、開発教育があるのだろうかと思いがながら、その場をあとにした。

最後に、通称「セメント通り」の焼肉屋さんで、参加者一人ひとりの自己紹介と感想を述べあい、歓談した。学生、教員、自治体職員、会社員など、パリエティーに富んだ構成員、それに年齢層も幅広く総勢約30名。皆、今日は貴重な体験ができたし、身近なところに、開発教育の事例となる問題があることを確認しあって散会した。

（秀島一光）

Topics

刊行物のご案内

NGO活動推進センターが1990年3月に開いたNGOによる開発教育（地球市民教育）ワークショップの報告書が刊行されました。一部1,350円。郵便振替で申し込んでください。口座番号：東京7-608391，加入者名：NGO活動推進センター。通信欄に開発教育ワークショップ報告書希望と明記のこと。

日本ユニセフ協会がユニセフ活動報告1992年版を刊行しました。お問い合わせは〒160 東京都新宿区大京町 31-10 同協会まで。

シャプラニール＝市民による海外協力の会が20周年を記念して3冊の書籍を刊行しています。シャプラニールの熱い風・第一部、同

じく第二部、NGO最前線の三冊で、前二者はめこん刊で各2,400円、後者は柏書房刊で1,200円。申し込み・問い合わせは〒169 東京都新宿区西早稲田 2-3-1の同会まで。

大阪アジア図書館

— アジアの図書貸出します

大阪市淀川区でアジア図書館の設立をめざしているアジアセンター21では、昨年夏から第一期として、アジア関係の図書3万冊を開架方式で展示、図書館機能をオープンさせた。蔵書は今年の始めから一人三冊まで、一ヵ月間、館外貸出しもしている。問い合わせは〒533 大阪市淀川区淡路 5-16-21の同センターまで。電話は06-323-1126。

“インドシナ難民の明日を考える会”（代表：永瀬一哉さん）は、神奈川県相模原市を中心として、インドシナ難民の子供たちに日本語を教える活動などをしていますが、先日、冬休みを利用して、カンボジアへのスタディ・ツアーを行ないました。その時のメンバーの一人、村上哲範さん（大学生）から、ツアーの報告をいただきました。

私がカンボジアで見えたもの

村上哲範

初めて訪れたプノンペンとはとにかく賑やかであった。我々には無秩序にしか見えない道の流れや絶え間のないクラクションの音、そして沢山の人や物が醸し出す雑然とした雰囲気。それらは、私にとってはもはや活字や映像でしか知ることのできない昭和20年代の我が国を思い起こさせた。ここはカンボジア第一の都市であるが、「都市」ではなく「街」と呼ぶほうが相応しい様に思える。その「街」の人々の表情は決して明るいとは言えないが日本で想像していた様な暗く沈んだものでもなく、この国の歴史そして現在を知らなければ貧しい以外の何の特徴も無い街と思ったことだろう。しかし良く辺りを見回してみると所々にある壊れた建物や穴だらけの路面がここで戦いのあったことを物語っている。そんな中で幾つか見かける立派な建物にあるのは、大抵「HOTEL」の文字か国連の機関であることを示す青い看板だ。明かに外国人向けと思われる奇麗な商店やレストランも多く、国連関係者や観光客相手の商売がいかに金になるかが窺える。そのためか、最近インフレがひどく、9月には1ドル＝800リエル程度だったのが、我々の訪れた12月末には、2200リエルにまでなっていた。最高紙幣は500リエルで缶ジュースを1本買うにもそれが2枚必要とされる。外国人向けのレストランでリエル払いをしようものならそれだけで大仕事だ。そして、現在のこの国の問題を如実に表わしているのが、我々の行く先々で見ることのできる物乞いの人達であろう。彼らは内戦で心身に障害を持つようになった人両親のいない子供、地方からあてもなく出てきた人などが大半だそうで、路上で寝起きする姿も大変多く見受けられる。その中には「危険」だという理由でプノンペン政府によって強制収容所のような場所に入れられる人も居るのだ。その収容所の中を見る機会があったのだが、そこでは「危険」という概念からは遠いように見える人々が生活という概念からははるかに遠い日々を送っている。私はそこにこの国の我々の目には触れることのない暗闇を感じた気がした。

到着の翌日、タイからの難民帰還列車が来ると聞いて見学に行った。郊外の何もない原っぱに停まった古めかしい車両からソロソロと降りてきた人々は笑いも少なく、その目は何となく不安そうである。彼らはとりあえずUNHCRのレセプション・センターへ行くが、2、3日後にはもう希望する土地へと発って行かねばならない。その関係者は、彼らにとってこれから行く場所では却って辛いことばかりだと言う。なぜなら、そこでは難民キャンプとは違い衣食住の保証などは無く、自分達で生活しなければならぬからである。加えて、祖国でありながら

も「よそ者」として入って行かねばならない場合もあるらしい。そのようなことから挫折した人々がプノンペンに出てきて先の如くになってしまうのであろう。街の賑やかな明るさと比べて彼らに暗さが見えるのはあながち先入観によるものだけではなかった様だ。

その後、我々は何人かの国連機関やNGOのスタッフから話を聞くことができた。様々な立場から様々な意見が出てきたが、皆カンボジアの将来についていろいろ考えているながらも実際はまだ模索中であるといった感じが強い。そんな中で共通しているように思えたのは、とにかく復興にはカンボジア人による自主的な行動、それも民衆レベルでの、が必要とされるということであった。そのためには物資や知識を与えるだけの援助ではなく、長期的な計画の下で自身や周囲の改善に対する自主性の啓蒙活動なども大事になってくるのではないだろうか。しかし、まず我々がしなければならないのは、何が必要とされるかを考えずに利潤追求や同情からただ与えるだけの援助は「大きなお世話」以外の何ものにもならないことを認識することだと、私自身の反省も含めて、思える。

この様に私がカンボジアで見えたものはほとんどが「戦後」の「これから良くなる」であろうカンボジアである。帰国するころにはその「戦後」を確認したような気にさえなっていた。しかし日本で旅行中にこの国で起こった様々な事件、特にベトナム系漁民の虐殺、を知り、カンボジアは、我々観光客が見る様な「戦後」では決してなく、今もって武器が人々を圧迫する「戦争」の中にあって抜け出せないでいることを改めて知った。私はカンボジアの「これから良くなる」が停まらないことを祈るだけである。



世界の人口の高齢化

日本の人口の急速な高齢化がしばしば取り上げられるが、人口の高齢化は日本だけの現象ではなく、世界的な規模で進行している。国連の人口局の予測では、2025年には65歳以上の人口が今よりも2.5倍も増え、8億3千万人近くになるという。原因は出生率の低下と長寿化である。

予測では出生率の低下が始まる時期によって、世界を三つのグループに分けている。第一はいわゆる工業国を中心とするグループで、1950年以前に出生率の低下が始まった国である。このグループはこれから35年間、ほぼ安定した出生率が見込まれ、高齢人口は急激

に増加する。第二のグループである発展途上国では出生率の低下が始まるだろうとみられている。15歳以下の人口は増加し続けるが、高齢人口の増加よりもその増加の勢いは緩やかになる。第三の最貧困国群では、15歳以下の人口の増加が続き、2025年には1950年と較べると74%も多くなっていると予測される。世界全体の15歳未満人口は、総人口の25%にまで下がるだろうとされている。1950年には、その比率は35%だった。

Membership

新入会員

島村妙子（東京） 東 広史（埼玉） 大柿裕美（埼玉） 片桐洋史（東京）
猪狩みき（千葉） 森島牧人（神奈川） 竹前雅子（神奈川） 中村高明（神奈川）
加藤泰幸（愛知） 国際子ども権利センター（大阪） 北村眞佐子（神奈川）
中村貴子（神奈川） 豊住マルシア（神奈川） 甲斐沢とし子（神奈川） 長岡素巳（島根）
花見慎子（東京） 石川深幸（千葉） 金澤まり子（神奈川） 小林和恵（東京）
村上呂里（沖縄） 清水正能（神奈川） 伊藤弥生（神奈川） 中島秀行（埼玉）
里見 実（千葉） 川村知代（高知） キップ・ケイツ（鳥取） 小林美美子（岡山）
浜本大蔵（神奈川） 幸福純子（神奈川） 勢井美世（大阪） 法貴寿子（東京）
三代孝博（兵庫）

継続会員

伊東直子（東京） 上條直美（神奈川） 本橋 栄（東京） 嶺井明子（東京）
国保 茂（京都） 井上 健（タイ） 森山泰準（神奈川） 加藤明宏（大阪）
林美栄子（東京） 外崎富代（東京） 安達弘一（東京） 秀島一光（東京）
千葉茂樹（神奈川） 和仁達郎（神奈川） 岩崎裕保（大阪） 奥村 功（大阪）
武元茂人（三重） 真部誠一郎（東京） 鎌田敦子（宮城） 田中 力（東京）
西浦昭英（神奈川） 奈比川文雄（愛知） 川床靖子（東京） 松永然道（静岡）
浦田広朗（千葉） 立正佼成会青年本部（東京） 協力隊を育てる会（東京）
藤原 樹（岡山） 福山YMCA（広島） 堀場和子（神奈川） 国際開発センター（東京）
堀本隆保（神奈川） 長坂二郎（埼玉） 小沢晴司（福島） 森岡嘉代子（東京）
国際協力事業団九州支部（福岡） 鈴木寛一（東京） 角田 仁（東京） 石井昭男（東京）
木股菜穂子（神奈川） 加藤富子（愛知）
シャプラニール＝市民による海外協力の会（東京） 松尾通成（茨城） 茂呂雅之（東京）
曹洞宗国際ボランティア会（東京） 幸田雅夫（東京） 木下理仁（東京）
大山恭子（愛知） 日本シルバーボランティアズ（東京） 京都YMCA（京都）
鳥居香代（UK） 平田 哲（京都） 梅村治夫（京都） 井村 誠（愛知）
小林 栄（東京） 佐々木美恵子（神奈川） 河合千尋（奈良） 梶井恵子（宮崎）
上岡直子（埼玉） 坪内 陸（神奈川） 宮原朋子（徳島） 村上 朗（千葉）
西井和裕（愛知） 田上喜美（宮城） 岡崎淑子（東京） 石井 正（東京）
ケアジャパン（東京）

以上、いずれも1992年12月28日～1993年3月2日受付分、敬称略、受付順

お詫び 前号の「継続会員」の欄で、吉開 潔様のお名前が間違っていました。お詫びいたします。

※ 会費を納めたのにこの欄に名前が記載がないという方がいらっしゃいましたら、お手数ですが協議会事務局までご連絡ください。

AHI スリランカ生活体験ツアー

スリランカの草の根地域保健・開発ワーカー（元AHI研修生）が活動する村でのホームステイ、生活体験を通じて、地域づくりのための人々の努力、生き方に接し、スリランカと日本の社会、開発のあり方などについて考える。

期間 1993年7月24日～8月7日
（変更される場合もあり）
費用 約25万円
対象 18歳以上の男女、12～13名
4月下旬から3～4回の準備会に出席可能な人。但し、出席できない遠距離からの参加者の枠も若干あり。
問合せ 〒470-01 愛知県愛知郡日進町
米野木字南山 987
朝アジア保健研修財団（AHI）
☎05617-3-1950
（担当：林かぐみ）

第3回関東甲信越 外国人問題フォーラム
「外国人と共に生きる社会をめざして」

とき 4月29日・30日
ところ 長野市内
1日目 篠ノ井市民会館（長野市）
12:00 開会
各代表問題提起
分科会（女性、医療、労働等）
18:00 移動後、松代にて交流会
2日目 松代文化ホール
9:00 分科会報告、アピール
13:00 劇団現代座公演
「もくれんのうた」
15:00 閉会
参加費 3000円
宿泊費 7000円
問合せ ☎0262-26-1125
（民衆運動研究所）



熱帯雨林と先住民

講師 アンニャ・ライト氏
オーストラリアで環境保護団体を設立。ベナン（マレーシア）の国際会議「第三世界の熱帯林の危機」に参加。89年に2度目のサラワク訪問。90年に全国ツアーを行なう。今回は4度目の来日。

とき 4月2日（金）
18:30～20:30
ところ カンダパンセ506号室
東京都千代田区西神田
JR水道橋駅西口徒歩5分
参加費 1000円
問合せ ☎03-3770-6709
（サラワク・キャンペーン委員会）

主催のサラワク・キャンペーン委員会では、5月以降も次のような講座を予定しています。詳しくは電話でお問い合わせください。

5月13日「熱帯林と先住民」
講師：井上 真（東京大学）
6月19日「先住民と開発～フィリピン」
講師：玉置泰明（静岡大学）
7月10日「開発・環境・先住民」
講師：馬橋憲男（国連広報センター）
9月18日「アイヌ民族の歩み」
講師：知里むつみ（関東ウタリ会）
10月9日「イヌイット（エスキモー）の現状」
講師：スファート・ヘソリ（人類学者）
11月27日「国際先住民年を振り返って」
講師：上村英明（市民外交センター）

関東ウタリ会シンポジウム
アイヌ民族と教科書

とき 3月28日（日） 13:00～17:00
ところ 早稲田大学
15号館102号教室
（校門は閉まっているので、正門脇の通用門から入る）
参加費 1000円
問合せ ☎03-3968-2125
（関東ウタリ会）

第3回アジア市民フォーラム

海外協力をすすめる市民が集い、とことん語り、考える3日間。88年（小田原）、89年（淡路島）に行なわれ、NGOと市民のネットワークづくりを進めた「アジア市民フォーラム」が、4年ぶりに今年、愛知県で開かれる。

アジア各国の芸能、交流会や、18の分科会が予定されている。分科会のテーマは「援助を越えて - どうする日本の国際協力」「アジアのNGO、日本のNGO - これからのあり方を求めて」「行政と市民の井戸端会議 - 地域と国際化」「戦争 - 知ることから始めよう」など。

とき 5月1日（土）～5月3日（月）
ところ 愛知県労働者研修センター
（愛知県瀬戸市）他
定員 400名
参加費 全日程参加（2泊3日5食付き）の場合19,000円。ほかに、1泊のみ、日帰りの参加も可能。
問合せ アジア市民フォーラム'93事務局
〒461 名古屋市中区徳川
2-11-17
「中部リサイクル」気付
☎052-931-4134

「開発教育」入門ワークショップ

～南北問題と子どもたち、南の世界の貧困と私たちの関係を考える～
参加型のプログラムを通して、南北問題・第三世界の子どもたちの状況、開発教育について考える。

前半・後半のAとBの2回コースのため、2回受講が原則。

とき 前半（A）4月22日（木）18:40～21:00
後半（B）5月21日（金）18:40～21:00
テーマ 「南の世界の子どもたちと、私たちの持つイメージ」
「貧困を生み出す構造と、NGOの活動について」
ところ 国際子ども権利センター会議室
定員 10～30名
講師 栗野真造（国際子ども権利センター）
参加費 500円
問合せ 国際子ども権利センター

〒531 大阪市北区本庄東1-18-14
アジスト90、401号
☎06-375-5466

※ 読者の皆さんからの情報をお待ちしています。締切りは偶数月の15日。協議会事務局（ニュースレター係）宛にお送りください。

開発教育 ニュースレター 隔月刊
1993年 3月1日発行 第41号

発行：開発教育協議会
〒169 東京都新宿区西早稲田
2-3-18-61
TEL：03（3207）8085
（月・水・金 10:00～18:00）
FAX：03（3207）0226

編集：ニュースレター編集チーム

お願い：ファックスには必ず「開発教育協議会」と宛名を明記してください。

編集室から……

「新入会員・継続会員」のなかに自分の知っている名前を見つけて、「あ、あの人も」と思うことがあります。

■会員が増えることはとてもうれしのですが、果たして期待されているだけの情報を送ることができていないだろうか、ちょっと不安になることもあります。

■年度の変わり目を迎え、新しい運営委員を募集しています。協議会の活動を充実させるため、ボランティアとして関わってみようという方、ご連絡をお待ちしています。

(K)

開発教育協議会は、開発教育の推進に関心をもつ団体、個人であればどなたでも入会できます。会員の方には、協議会が発行する研究誌をはじめ、ニュースレターや研究集会・ワークショップ等のお知らせをお届けします。また、研究集会の参加費割引の特典もあります。会費は1年単位を基本とし、その額は次のとおりです（いずれも1口あたり）。

団体会員 20,000円 / 個人会員 5,000円 / 学生会員 3,000円

入会の手続きについては、協議会事務局にお問い合わせください。